

保育園児を対象とする運動遊びの追試 － 運動能力との関連に注目して －

橋本和幸¹⁾ 吉岡秀晃²⁾ 長谷川龍成³⁾ 上岡尚代³⁾ 田辺達磨³⁾
了徳寺大学教養部¹⁾
ネイチャー・アドベンチャー・ジャパン²⁾
了徳寺大学・健康科学部³⁾

要旨

本研究は、先行研究で開発した保育園で行う運動遊びを、保育園を変えて追試を行ったものである。対象となる保育園は、先行研究と比べて、施設が手狭で、運動担当の保育士が不在という条件であった。運動遊びを保育園で継続して実施してもらい、3か月後に再度運動能力調査6種目を行って効果測定を行った。この結果、評点が有意に上昇した種目、有意に下降した種目、変化がなかった種目が2種目ずつに三分された。運動遊びが筋出力の調整とバランスに影響する2種目は成績が向上したと考える。一方、大きく強くジャンプしたり、全速力で走るなどの動きをしたりすることが影響する2種目は、園の施設の手狭さにより、成績が低下したと考える。

キーワード：運動遊び，保育園，運動能力検査

The supplementary test of athletic plays for nursery school children: Relationship with the athletic ability

Kazuyuki Hashimoto¹⁾, Hideaki Yoshioka²⁾, Tatsunari Hasegawa³⁾,
Naoyo Kamioka³⁾, Tatsuma Tnabe³⁾,
Center of Liberal Arts Education, Ryotokuji University¹⁾
Nature Adventure Japan²⁾
Faculty of Health Science, Ryotokuji University³⁾

Abstract

The purpose of this study is to retest the effect of the exercise plays that we developed in our literature review, for verified by changing the nursery school. But this nursery school has some problem, this school is narrow than previous it, lack of instructor for physical education. We asked the school to continue the exercise plays, we devised and after three months again we performed six types of exercise capacity survey and measured the effects. The results in the present investigation suggest that this exercise improves adjustment and balance of muscle output. On the other hand, the performance of types of jumping and running is decline, the reason can be inferred from the narrowness of the school than previous it.

Keyword: exercise play, nursery school, exercise test

I. 問題と目的

保育園における運動遊びの先行研究は、常設の体育館、遊戯室、広い園庭など恵まれた環境での実践例が多い^{1) 2) 3) 4)}。もちろん、それらも有益な知見であるが、施設のスペースや設備が限られた環境で保育活動を行う保育園でも、無理なく実行できる運動遊びを開発することが重要であると考えられる。そこで、筆者らは限られたスペースや設備の中でも、短時間に行うことが出来る運動遊びの開発を継続している^{5) 6)}。この運動遊びは、先行研究^{5) 6)}でも指摘した通り、園児にとっては実施して楽しい内容であり、保育士にとっては実施が出来るだけ負担にならない内容にすることで、園児及び保育士のモチベーションが続く遊びを考案することが、長期間継続して実施する上で重要である。

本研究では、先行研究に比べて園の設備やスタッフがさらに制限された保育園を調査協力園として、同様の運動遊びを実施した結果を分析する。その結果から、運動遊びをより多くの園で実施可能なものにするために、内容を吟味することを目的とする。

筆者らの役割分担は、体験教育及びアドベンチャー教育のディレクターである第二筆者が運動遊びを考案する。そして、その運動遊びの妥当性を、心理学者である第一筆者が心理面から、柔道整復師や健康運動指導士である第三筆者と第五筆者が身体面から、理学療法士である第四筆者が統括的に、それぞれ検討する。

II. 方法

1. 研究計画

新しい調査協力園において、園児の運動能力を測定したうえで、先行研究^{5) 6)}で開発した運動遊びを継続して実施してもらい、一定期間経過後に運動能力を測定し、運動遊び実施前後の記録を比較する。

運動遊びの効果を検証するための運動能力検査には、文部科学省の「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」⁷⁾でも利用されたMKS幼児運動能力検査⁸⁾の6種目で行う。

本稿での報告は、Step1とStep2とStep3に分かれている。まずStep1で運動遊び実施前の運動能力検査を行った。次にStep2では先行研究^{5) 6)}で開発した運動遊びの追試を行った。最後にStep3では運動遊び実施後の運動能力検査を行った。

なお、調査協力園は、園児の運動能力向上のための調査実施を筆者らに依頼してきた保育園である。

2. 調査対象者

調査対象園の5歳児クラス(22名在籍)の園児が調査に協力してくれた。事前調査に参加した園児は21名、事後調査に参加した園児は16名、事前事後ともに全種目に参加した園児は15名(男6名、女9名)で、その平均年齢はStep1の段階では5歳8か月(5歳3か月～6歳2か月)であった。

3. 調査協力園

首都圏の公立保育園1園を対象に実施した。この園は各年齢のクラスに専用に部屋があったが、屋内にはそれ以外にクラス全体が活動可能なスペースはなかった。また、屋外に園庭はあるが手狭で、公園等の広場は徒歩で10分以上移動する必要がある。

なお、先行研究⁶⁾と異なり、運動指導を担当する保育士はおらず、園児の活動全般を担当が行っていた。

4. 倫理的配慮

本研究は、了徳寺大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2723）。調査協力園から保護者に園児を調査対象とした研究の趣旨及び内容、プライバシーの保護について説明を行ってもらい、同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. Step1 運動遊び実施前の運動能力検査

1) 調査項目

MKS幼児運動能力検査の6項目を行った。具体的には次の検査内容であった。なお、本研究の調査協力園は先行研究⁶⁾のように25mの直線路を用意できるスペースがなかったため、MKS幼児運動能力検査実施要項⁹⁾の指示に沿って代替え種目として往復走を行った。

(1)往復走：15mの往復路を作り、スタートラインから5m先に印をつけ（認定ライン）、その位置に旗を立てた。スタートラインから折り返し地点を経由して認定ラインを通過するまでの所要時間を1/10秒単位で計測した（1/100秒単位は切り捨て）。測定は1回だけであった。

(2)立ち幅跳び：屋内の床で裸足になって両足踏み切りによる跳躍距離を行わせた。2回計測し、上位の記録をcm単位で記録した（50cm未満は切り捨て）。

(3)ボール投げ：ソフトボールを使用して投距離を測定した。計測は2回実施し上位の記録をcm単位で記録した（cm未満は切り捨て）。

(4)両足連続跳び越し：屋内の床で、4m50cmの距離に10個の積木（今回は発泡スチロール製）を50cm間隔で置き、両足を揃えて1つ1つの積木を正確かつ迅速に跳び越させた。時間を1/10秒単位で測定し、2回実施したうちの上位の記録を採用した（1/100秒単位は切り捨て）。

(5)体支持持続時間：平行棒の間に立ち左右の平行棒を握り、合図で両腕を伸ばし、足を床から離し何秒間維持できるかを測定した。1回だけ実施し、記録は秒単位で測定した（秒未満は切り捨て。3分経ったら終了させた）。

(6)捕球：直径15cmのゴムボールを3m離れた地点から投げて、ノーバウンドで捕球させた。10回の投げたうち何回捕球出来たかを記録した。

2) 調査時期

事前調査を2018年7月に、事後調査を2019年1月に、ともに午前中の通常保育（10時から12時まで）を1回使って実施した。

3) 運動能力調査の結果

運動能力検査の結果は、文部科学省の「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」⁷⁾で用いられている方法で算出した。具体的には、園児がそれぞれの検査で出した成績を、同報告書の100-101頁の基準で1～5点の5段階得点（5点に近いほど良い成績と言える）に変換した。本研究で対象とする5歳児の場合、月齢で前半（5歳0か月～5ヵ月）と後半（5歳6ヶ月～11ヶ月）に分けて表1のように変換した。そして、評定点の解釈は表2の通りである。

表1 運動能力検査記録の評定化基準

種目	評定	5歳前半		5歳後半		6歳前半		6歳後半	
		男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
往復走(秒)	5	7.9以下	7.9以下	7.4以下	7.6以下	7.4以下	7.5以下	7.2以下	7.3以下
	4	8.0~8.7	8.0~8.9	7.5~8.2	7.7~8.2	7.5~7.9	7.6~8.1	7.3~7.8	7.4~8.0
	3	8.8~9.8	9.0~9.9	8.3~9.1	8.3~9.2	8.0~8.6	8.2~8.9	7.9~8.2	8.1~8.8
	2	9.9~11.3	10.0~11.6	9.2~10.5	9.3~10.7	8.7~9.9	9.0~10.1	8.3~9.8	8.9~9.9
	1	11.4以上	11.7以上	10.6以上	10.8以上	10.0以上	10.2以上	9.9以上	10.0以上
立ち幅跳び(cm)	5	122以上	114以上	131以上	121以上	139以上	127以上	142以上	130以上
	4	105~121	96~113	115~130	105~120	123~138	110~126	126~141	113~129
	3	87~104	78~95	98~114	89~104	105~122	94~109	107~125	95~112
	2	66~86	62~77	77~97	72~88	84~104	77~93	85~106	78~94
	1	65以下	61以下	76以下	71以下	83以下	76以下	84以下	77以下
ボール投げ(ソフトボール、0.5m)	5	8.5以上	5.5以上	10.0以上	6.5以上	12.0以上	7.5以上	12.5以上	8.0以上
	4	6.5~8.0	4.5~5.0	7.5~9.5	5.0~6.0	8.5~11.5	5.5~7.0	9.0~12.0	6.0~7.5
	3	4.5~6.0	3.0~4.0	5.0~7.0	3.5~4.5	5.5~8.5	4.0~5.0	6.0~8.5	4.5~5.5
	2	2.5~4.0	2.0~2.5	3.0~4.5	2.5~3.0	3.5~5.0	3.0~3.5	4.5~5.5	3.0~4.0
	1	0.0~2.0	0.0~1.5	0.0~2.5	0.0~2.0	0~3.0	0.0~2.5	0~4.0	0.0~2.5
両足連続跳び越し(秒)	5	4.5以下	4.5以下	4.2以下	4.3以下	4.0以下	4.1以下	3.9以下	4.1以下
	4	4.6~5.2	4.6~5.3	4.2~4.9	4.4~5.0	4.1~4.7	4.2~4.8	4.0~4.6	4.2~4.7
	3	5.3~6.3	5.4~6.4	5.0~5.8	5.1~5.9	4.8~5.5	4.9~5.6	4.7~5.4	4.8~5.5
	2	6.4~9.1	6.5~9.2	5.9~7.9	6.0~7.7	5.6~6.9	5.7~7.0	5.5~6.7	5.6~6.5
	1	9.2以上	9.3以上	8.0以上	7.8以上	7.0以上	7.1以上	6.8以上	6.6以上
体支持持続時間(秒)	5	74~180	78~180	109~180	103~180	126~180	126~180	154~180	139~180
	4	38~73	36~77	54~108	53~102	64~125	64~125	76~153	68~138
	3	17~37	16~35	25~53	25~52	31~63	32~63	36~75	35~67
	2	5~16	5~15	9~24	9~24	11~30	13~31	14~35	15~34
	1	0~4	0~4	0~8	0~8	0~10	0~12	0~13	0~14
捕球(回)	5	10	9~10	10	10	10	9~10	10	10
	4	8~9	7~8	9	8~9	10	9~10	10	10
	3	4~7	4~6	6~8	5~7	7~9	6~8	8~9	7~9
	2	2~3	0~3	2~5	2~4	4~6	3~5	5~7	4~6
	1	0~1	0~1	0~1	0~1	0~3	0~2	0~4	0~3

表2 MKS運動能力検査の評定点の解釈方法

5点：非常に高い。発達が標準より非常に進んでいる。理論的出現率7%
4点：かなり高い。発達が標準よりかなり進んでいる。理論的出現率24%
3点：ふつう。標準的な発達である。理論的出現率38%
2点：少し低い。発達が標準より少し遅れている。理論的出現率24%
1点：かなり低い。発達が標準よりかなり遅れている。理論的出現率7%

なお、同報告書⁷⁾では、幼児期に取得しておくことが望ましい基本的な動作、生活習慣及び運動習慣を身に付けるための効果的な取り組みを行う幼稚園・保育園を「実践園」と定義して、実践園全体での運動能力検査の5段階得点の平均値を3年分算出している。

本研究では、この実践園全体の1年目の平均値を全国の平均値として採用し、調査協力園の5歳児クラス16名の平均値を比較した。そして、全国の平均値と比べての優劣を判定した。

前述の通り、5点に近いほど良い成績なので、対象園の結果は、表3の通り、ボール投げ、両足連続跳び越し、体支持持続時間の評定は全国平均よりも低く、先行研究⁶⁾の調査協力園よりも運動能力の平均値が低かった。

表3 運動遊び実施前の運動能力検査の結果と全国平均の比較

	往復走	立ち幅跳び	ボール投げ	両足連続跳び越し	体支持持続時間	捕球
調査協力園平均	2.94	3.06	2.81	2.25	2.33	2.63
全国平均	2.90	2.95	3.05	3.09	2.94	3.27

4) 運動能力調査の結果の解釈

運動能力検査の各種目からわかる運動能力を、次のように解釈した。

(1)往復走：全身の瞬発的的最大筋力発揮が求められる。また、走る動作は脚力の他、上肢を連動させ早く動かす(腕を振る)動作も重要である。

(2)立ち幅跳び：全身の瞬発的的最大筋力発揮が求められる。また、記録の向上には上肢を大きく振り上げ反動をつける動作と跳ぶ角度が重要となる。

(3)ボール投げ：投げる方向や強さを選択する技能が必要である。それが身に付けられているかどうか。

(4)両足連続跳び越し：50cm毎に積木がおいてあり、積木と積木の中心付近に着地しなければうまく次の積木を跳び越すことができない。連続して筋出力を調整し積木を超えていく必要がある。この時に使われる筋群は主に股関節・膝関節・足関節の屈筋群で、上肢は腕を広げる形で上半身を固定しバランスをとる。

(5)体支持連続時間：上体の力をどの程度維持できるか。

(6)捕球：飛んできたボールを目で追い体(手)で捕球するという、二つ以上の器官を同時に使う協応力が必要な動作である。また、どのあたりに落ちてくるか、どのタイミングで腕を引き寄せるまたは挟めばボールがとれるかという判断力・予測力が必要である。

2. Step2 運動遊びの実施

1) 運動遊びの内容

先行研究^{5) 6)}で開発した運動遊びは、跳ぶこと、手と他の部位を協調させること、手で用具を扱うことを向上させることを中心とするであった。具体的には、「ケンケンパー」「手足が描いてあるマット」「ビーチボール送り」の3種目であった。その内容は次の通りである。

(1)ケンケンパー

フラフープを1個または2個ずつ床に置いて列を作る。その列を、フラフープ1個には片足を入れられるルールにして、列の端から端へ移動させる。

この運動遊びは、「跳ぶ」運動にかかわる能力を伸ばすものである。つまり、連続両足跳び越しに必要な「連続して跳ぶため」に身体の使い方を工夫することを覚えることを目指す。

ケンケンパーについて、両足跳び、片足跳び、右足あるいは左足のみを使うなど、跳び方に変化をつけることで、身体の使い方を指示に合わせて考えさせる効果もある。また、輪の位置を変えることで、飽きにくくできると考えられる。

(2)手足が描いてあるマット

バスマットあるいはゴムマットを10cm四方程度の四角形に切り分け、そこに左手、右手、左足、右足の絵を描きこむ。マットを床にランダムに配置する。園児には、マットに描いてある手や足しか乗せてはいけないと説明し、そのルールの中で、できるだけ早く向こう側にたどり着くように教示する。

この運動遊びは、手足を協調して使う方法、ちょうどよく跳ぶ方法、手を使って身体を支える方法などを学ぶことができる。また、マットの位置を変えることで、飽きにくくできると考えられる。

(3)ビーチボール送り

縦の列を作らせて、前の園児から後ろの園児にボールを渡して、できるだけ早く列の後ろまでボールを送ることを目指す。この時に、頭上→股抜き→頭上→股抜きとか、左→右→左→右というように、直前の人と違うボールの送り方を指定すると、効果的である。

この運動遊びは、相手がとれるようにボールを差し出すこと、捕球を通して手の使い方を学ぶことができる。また、チーム対抗戦にすることで、目標ができるためやる気を高められると考えられる。

2) 調査協力園による試行

第二筆者が考案した運動遊びを、対象園の5歳児クラスの園児に第二筆者と第一筆者で実施の見本を見せるために試行した。具体的には、「ケンケンパー」「手足が描いてあるマット」「ビーチボール送り」の3種目を、30分程度かけて順番に試行した。

3) 調査時期

園児への試行は2018年7月に、通常保育（10時から12時まで）の時間内で1回行った。

4) 園のスタッフへの試行と話し合い

筆者らによる試行の後、実際に運動遊びを指導する対象園のスタッフたちに試行した。そして、下記の通り先行研究⁹⁾と同様に行うことが同意された。

(1)保育園の1日の動きを確認し、午前中2時間の設定保育の時間内に、毎日15～20分程度入れることとした。

(2)園の都合によって、きっちり何回、何分とやらなくても、給食に間に合うように切り上げたり、実施を休む日があったりしても問題ないということにした。

(3)運動遊びを実施する保育士たちに確認してもらい、実施が可能であるとの判断となった。

3. Step3 運動遊び実施後の運動能力調査の結果

1) 運動遊び実施後の運動能力調査結果の全国平均との比較

運動遊び実施後（以降、事後）の運動能力検査の結果を、事前と同じ6種目の調査を行って算出した。事後の対象園児は、5歳後半（5歳6ヶ月～11ヶ月）、6歳前半（6歳0ヶ月～5ヶ月）、6歳後半（6歳6ヶ月～11ヶ月）、に分けて前出の表1を用いて1～5点の5段階得点に変換した。この結果をStep1と同様に全国の平均値と比較した。その結果は、表4の通りボール投げと捕球が全国平均に近づいた。

表4 運動遊び実施後の運動能力検査と全国平均との比較

	往復走	立ち幅跳び	ボール投げ	両足連続跳び越し	体支持持続時間	捕球
調査協力園平均	2.44	2.25	2.94	2.81	2.13	3.25
全国平均	2.90	2.95	3.05	3.09	2.94	3.27

2) 事前と事後の運動能力検査の比較

(1)各種目の評定の平均値

調査協力園児の事前調査と事後調査の評定を、t検定で比較した（表5参照）。この結果、事後に数値が有意に上昇した種目は、両足連続跳び越し（ $t=-3.09$, $df=15$, $p<.01$ ）と捕球（ $t=-2.18$, $df=15$, $p<.05$ ）であった。一方、往復走（ $t=3.87$, $df=15$, $p<.01$ ）と立ち幅跳び（ $t=2.45$, $df=16$, $p<.05$ ）は事後に有意に下降した。

表5 調査協力園の運動遊び実施前後の運動能力検査の比較

	往復走	立ち幅跳び	ボール投げ	両足連続跳び越し	体支持持続時間	捕球
事前	2.94	3.06	2.81	2.25	2.33	2.63
事後	2.44	2.25	2.94	2.81	2.13	3.25
t値	3.87**	2.45*	-0.52	-3.09**	0.72	-2.18*

* $p<.05$ ** $p<.01$

(2)総合評価の事前事後比較

6種目の総合評定は、事前16.53点、事後16.33点と有意な変化は見られなかった（ $t=0.28$, $df=14$, n.s.）。そして、表6を用いて個人の総合評定をAからEまでの5段階評定に置き換えた。

表6 総合判定基準

段階	合計点
A	24～30点
B	20～23点
C	17～19点
D	13～16点
E	6～12点

表7 事前・事後の総合評定の比較

ID	事前総合 評定	事後総合 評定	変化	段階
1	D			
2	E	D	△	1
3	C	B	△	1
4	E	D	△	1
5	E			
6	D	C	△	1
7	D	D	-	
8	D	D	-	
9	E	D	△	1
10	D			
11	B	C	▼	1
12	A	B	▼	1
13	E	E	-	
14		E		
15	E			
16	E			
17	C	B	△	1
18	A	B	▼	1
19	B			
20	B	B	-	
21	D	D	-	
22	D	E	▼	1

凡例

△:上昇 ▼:下降 -:変化なし

事前・事後調査の両方に全種目参加した15人のうち、評定が上昇した園児は6名、同じ評定だった園児が5名、下降した園児が4名であった（表7参照）。

IV. 考察

1. 事前の運動能力検査の結果

事前の運動能力測定の結果が、全国平均を下回る種目が多かったのは、調査協力園の施設の手狭なことや運動指導担当の保育士がいないことなどにより、日ごろの保育活動の中で運動を行うことに制約があったことが影響していたと考えられる。

2. 事後の運動能力検査の結果

1) 評定が有意に上昇した2種目について

(1)両足連続跳び越し

この種目をうまくできないことには跳躍エラーが関係している。藤巻¹⁰⁾によれば、連続跳び越し動作で発生する跳躍エラーには、これまで①「両足同時踏切・着地が困難である」、②「両足や膝をつけられず、開いたまま跳ぶ」、③「規定された跳躍幅を越えて跳躍する」、④「跳躍に勢いがつきすぎて調子を崩し、連続跳躍の維持が困難になる」などが指摘されている。本研究で実施したケンケンパーでは、③と④をコントロールする要素があるため、保育時間に継続して実施したために両足連続跳び越しの記録が伸びたのではないかと考えられる。

(2)捕球

検査実施時の観察の結果、捕球の記録が良い園児の特徴は、①「ボールに慣れている（恐怖心が少ない）こと」と、②「その場でボールを取ろうとするのではなくボールの正面でキャッチを試みること」が挙げられる。石川¹¹⁾によれば、「ボールに慣れる・親しむ」→「ボールの多様な動きを楽しむ」→「ボールを操作する感覚を楽しむ」と段階的にボールを扱う機会持つことが大切であるとしている。本研究の運動遊びの「ビーチボール送り」は、次の3点で石川¹¹⁾の指摘と類似していると考えられる。①ボールに触れる機会が増えボールに慣れた。②渡されたボールを受け取ることで、手でボールを掴む感覚を得ることができた。③「頭→股」「右→左」などどのようにボールが動いてくるか、どこにいればボールが受け取りやすいかという判断・予測力を向上させた。

以上のように、両足連続跳び越しと捕球の2種目の評定が有意に上昇したことに、開発した運動遊びが良好な運動学習として影響したものと考えられる。

2) 評定に変化のなかった2種目について

(1)体支持連続時間

澤田・杉山・鹿内ほか¹²⁾では、戸外遊びの場所や時間が大幅に限定されると、空間の広さの問題、運動遊びの時間継続性の問題などにより、体支持持続時間の結果に影響を及ぼすと指摘している。調査に協力してくれた園は、澤田ほか¹²⁾程大きな制限ではなかったが、園庭が狭く近隣の公園まで園児の脚で10分以上かかるなど、運動遊びの機会が限られているため、同様の結果になったものと考えられる。

上肢で身体を支えるという点では、「手足が描いてあるマット」が関係しているとも考えたが、この種目は身体を支える腕の角度や時間の短さから、体支持連続時間の記録を向上させるまでには至らなかったと推測する。

(2)ボール投げ

石川¹¹⁾や春日・中野・小栗ほか¹³⁾によれば、ボール投げは投げる経験の量と適切な指導を受けることで向上するものと考えられる。本研究の調査協力園では、体支持連続時間の考察で述べた通り、園庭が手狭でボール投げを行えるスペースを日常的に確保することが難しく、用意した運動遊びは投球動作とは異なる動作であったため、記録を向上させるには至らなかったと考えられる。

3) 評定が有意に下降した2種目について

往復走と立ち幅跳びに共通する要因として、環境的要因の影響とそれをカバーできる運動遊びを用意できなかったことが考えられる。

(1)環境的要因

本研究の調査協力園は、園庭は手狭で遊戯などをする大きなスペースがない。これは、澤田ほか¹²⁾や坂本・篠原・柳澤ほか¹⁴⁾が指摘するように、大きく強くジャンプしたり、全速力で走るなどの動きをしたりする機会があまり多く得られない。このため、最大筋力発揮をする種目の評定が低下したのではないかと考えられる。このような条件の保育園では、現状の評定にかかわらず、公園など広い場所に行けない時には瞬発的筋力発揮ができるような運動遊びを行う必要があると考える。

(2)運動遊びの要因

この二つの種目に共通することは、瞬発的・最大筋力発揮が求められることと左右対称で上肢と下肢の連動した運動ということである。今回の3つの運動遊び(ケンケンバー、手足が描いてあるマット、ビーチボール送り)にはこの能力の向上を目的としていなかった為だと考える。ただし、運動遊びが記録の低下を助長する運動ということではないと考える。

3. 今後の課題

本研究の結果は、先行研究⁶⁾とは異なるものであった。今後は、引き続き保育園の設備やスタッフなどの条件が異なる調査協力園を増やし、効果の検証の精度を上げていく必要があると考える。

付記

開発した運動遊びを実践してくださった保育園、スタッフ、園児および保護者の皆様に感謝いたします。本研究は、平成30年度の了徳寺大学学科研究費(課題)を受けて実施されたものである。

V. 文献

- 1) 岩崎洋子編著(2018) 保育と幼児期の運動あそび(第2版) 萌文書林, 東京.
- 2) 柳澤秋孝・柳澤友希(2014) 0~5歳児の発達に合った楽しい!運動あそび ナツメ社, 東京.
- 3) 内田智子・大井拓也・筒井清次郎(2018) 幼児期のラダー遊び, サーキット遊びおよび自由遊びが体力・運動能力向上に与える影響: 内発的動機づけを重視した運動プログラムに注目して. 発育発達研究. (78), 1-12.
- 4) 常盤陽子(2014) 子どもを夢中にさせる運動遊びに関する一考察. 奈良県立教育研究所研究紀要. (21), 1-11.
- 5) 橋本和幸・上岡尚代・吉岡秀晃(2018) 保育園における継続可能な運動遊びの開発. 了徳寺大学研究紀要. (12), 19-28.
- 6) 橋本和幸・吉岡秀晃・上岡尚代ほか(2019) 保育園児に短時間で出来る運動遊びの継続と運動能力との関連. 了徳寺大学研究紀要. (13), 161-172.
- 7) 文部科学省 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm (2019.10.25 11:00アクセス)
- 8) 幼児運動能力研究会(2014) MKS幼児運動能力検査とは. 杉原隆・河邊貴子編著 幼児期における運動発達と運動遊びの指導-遊びのなかで子どもは育つ-. ミネルヴァ書房, 京都. 171-183.
- 9) 幼児運動能力研究会 MKS幼児運動能力検査運動能力検査実施要項 <http://youji-undou.nifs-k.ac.jp/determination/index.html> (2019.12.6 15:30アクセス)
- 10) 藤巻公裕(1989) 幼児の連続跳躍過程と動作エラーについて. 体育学研究. 34 (2), 167-174.
- 11) 石川哲也(2017) 幼児期の運動発達とボール遊び. 中京学院大学中京短期大学研究紀要. 48 (1), 63-66.
- 12) 澤田美砂子・杉山哲司・鹿内 菜穂ほか(2015) 環境と幼児の運動能力の関係-震災後福島県の保育所における運動能力検査の実施- 日本女子大学紀要 家政学部. (62), 21-27.
- 13) 春日晃章・中野貴博・小栗和雄ほか(2013) 幼児の投動作における遠投距離と正確性を向上させるた

めの指導プログラムの開発. SSFスポーツ政策研究. 3 (1), 185-192.

- 14) 坂本喜一郎・篠原菊紀・柳澤弘樹ほか (2014) 保育所における園児を取り巻く多様な物的環境と、子どもの身体活動量の関係に関する研究. 保健科学研究. 5, 39-56.

2019年11月25日 受理

